古墳時代の名取のようす

I -5-①

縄文時代の温暖化による海面上昇が終わり、丘陵の裾野まで侵入した海水も弥生時代にはかなり退きました。古墳時代が始まる頃には、海岸線が現在とほぼ同じ位置になり、名取平野が大きく広がりました。

名取川の堆積作用により川沿いに発達した自然堤防や海岸線が後退していく過程で形成された浜堤と呼ばれる微高地上には、周辺の土地に比べ水はけが良いことから、徐々に集落が営まれていったようです。その微高地の周辺は、後背湿地と呼ばれる水はけの悪い土地なので、水田として利用したのでしょう。

裾野に湿地がひかえる丘陵だけでなく、周辺に湿地の広がる自然堤防や浜堤は、稲作農耕中心の当時の人々にとって、理想的な土地であったに違いありません。

I -5-①

むかしの地形のようす

I -5-②

I -5-②

遺跡の分布図

I -5-③

I -5-③

古墳の起源

I -6-①

弥生時代の中ごろに出現した、地域の有力者を埋葬する「墳丘墓」と呼ばれる墓の影響を受け、しだいにそれが古墳へと発展していったと考えられています。西日本の有名な弥生時代の遺跡である吉野ヶ里遺跡でもこの墳丘墓が発見されています。

弥生時代の終わりごろには、地域の特色をそなえた墳丘墓が出現します。名取では低墳丘墓をはじめ、方形周溝墓や円形周溝墓がこれにあたるのでしょう。

方形周溝墓とは方形に、円形周溝墓とは円形に、それぞれ溝をめぐらし、その溝に囲まれた中央部に遺体を埋葬した墓です。

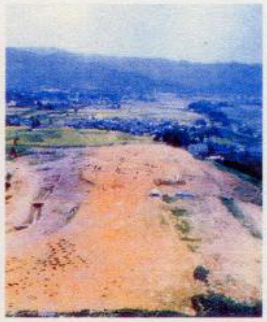
吉野ヶ里遺跡とは：

約６００年にわたる弥生時代の小さなムラがクニの中心的な集落へと発展していく姿をたどることができる貴重な遺跡です。九州地方の佐賀県にある遺跡です。

墳丘墓とは：

土をある高さに盛って遺体をおさめた墓のこと。

I -6-①



I -6-②-a

I -6-②-b